
FateでIS

武器屋の店員 A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t eでIS

【Nコード】

N 5 0 7 4 Z

【作者名】

武器屋の店員A

【あらすじ】

基本的に物凄くやる気の無い…というか、人としてどこか壊れてる主人公が、死ぬ 能力ゲット 転生という流れで、F a t eに登場する能力をぶら下げてIS インフィニット・ストラトス の世界へ行く話。

作者はISの原作を読んでいません。知識や解釈の誤りはハートとガッツと下ネタでカバーします。というかF a t eの方が好きです。

0 (前書き)

描写？へったくそですけど？

文章力？10年前に捨てましたけど？

0

side:???

すぐ近くから悲鳴が聞こえる。

誰の？

分らない。

ぼんやりと空を見上げる。

見上げる？

いや、俺は前を向いているはず。

ああ、仰向けになっているのか。

軽く息を吸う。

肺の中をガスの臭いが満たした。

近くに車でもあるのか？

視線を横にずらす。

眼に入るのは、鮮烈な赤。

なんだこれ。

ああ、俺の血か。

きつたねえなあ……。

side out

side：神

さーて、困った。

目の前で煌々と燃え上がり、もはやダークマターと化した書類を見て、何度目か分からない溜め息をつく。

「ハア……どーしよっかなー……」

……ん？ あ、どーもみなさんこんにちは。 え？ ボクですか？

ボクは神です。 っていうか上に書いてあるじゃないですか。 神ってそれくらい知っておいてくださいよ。

…… え？ 知ってる？ あっそ。

っていうかちよつと聞いてくださいよ。 実はボク、今ひじょーに困ってるんです。

ついさつき書類が燃えたんですけどね、その書類っていうのが『1人の人間の人生』が記された書類なんですよ。 それが燃えるってい

う事は、即ち『死』を意味するんですけど、まあつまるところ、とある人間がさつき死んだんですよ。……え？　その何が問題なのかって？

いや、ただ死んだだけならいいんですよ。問題なのは、その人間の寿命が70年近く残ってることなんですよー。

「ほんと、なんで死んだんだよ……」

この時、ボクは目の前の処理に気を取られたせいで、あることに気が付かなかった。

実は書類は2枚重なっている状態で、燃えたのも当然2枚だったということに。

……うるさいな！ 神様だって全能じゃないんだよ！

side out

0 (後書き)

黒髪っていいよね。

1（前書き）

ただ助けを待っただけなのか？ただ流されるだけなのか？

じゃあお前は一体何のために生まれてきたんだ？何をして生きた証を刻むんだ？

何かを為す自信が無いのか？何もしないまま終わるのか？分からないまま、答えられないまま終わるのか？

ただ待つてるだけじゃ始まらない。ただヒーローを待っただけじゃ何も変わらない。今を変える方法は1つ。

他の誰でも無い、お前がヒーローになるんだ。

アンパンマン

何も無い、ただ限りなく白が広がる空間。

そこに立つ1人の少年と1人の子供。

少年の方は学生服に身を包み、その眼はどこか虚ろで、見ていると吸い込まれそうになる。きっと変わらない吸引力を誇るに違いない。対して子どもの方は、『NIKE』と書かれたジャージを着ている。無論、上下セットだ。ちなみにオレンジ色である。

以下、子どもをNIKE、少年をダイソンとする。

NIKEがダイソンを上から下までじつくりと眺め、口を開いた。

「えーっと、ヤマダ コウスケ山田幸助くんだね？」

山田幸助と呼ばれた学生服の少年 ダイソンは、NIKEの問いに対し、まったくの無表情で返す。

「はい」

……二人の間に生温い沈黙が流れる。

先にギブアップしたのはNIKEだった。

「あ、あのさ、やけに反応薄いね」

「ええ、まあ」

……再び沈黙が支配する。

「えーっと、TPPって何の略か知ってるかな？」

「ちん っぱ」

……。

「あー、そのー、とりあえず現状を伝えるけどね？　ボクは神様で、キミはもう死んじゃったんだよ」

「そうですか」

自身の正体と、相手の状態を明かしたにもかかわらず、それでも一向に表情を崩さず、平淡な声色で返し続けるダイソンに、NIKEはどこか恐怖にも似たものを感じていた。

（なにこの人間。正直気持ち悪いんだけど。っていうかここまで会話のキャッチボールが成り立たないなんて……）

しかし、このままというわけにもいかない。

NIKEは気を取り直し、再び言葉を投げかける。

「た、確かにキミは死んだんだけどね？　人間には押し並べて『天寿』っていうものがあるんだ。でもキミの場合、その天寿を全うする前に死んじゃったんだよね」

しかし、

「へえー」

ダイソンはNIKEからのボールを全力で地面に叩き付ける。フォークなどというレベルではない。キャッチボール？ 何それ？ 的な状態どころではない。

引きつった表情を浮かべながらも、NIKEは必死に食い下がる。

「キミが死んだ年齢は16歳。でもキミの本来の寿命は88歳。つまり、キミには最低でもあと72年は生きてもらわないといけないんだ」

「……なんですか？」

！！

ここにきてようやくダイソンが反応を示した。思わず感嘆符を使うくらいびっくりである。

NIKEは密かに達成感に浸りながら、ダイソンの放った問いにたいして返答する。

「いや、なんでって言われても……。ルールだからとしか言いようがないなあ」

「誰がどのような理由の下で定めたのかも分からないようなルールに従えと言っのか？」

突如として早口で饒舌にまくしたてるダイソン。一体どうしたというのだ。

「えっ、いや、だか」「ふん、馬鹿馬鹿しい。結局神といえど、他人が勝手に作ったわけのわからないルール1つままならんとはな。そうやって自分が何のために何をしているのかも分からないまま朽ちていくがいいさ」

さらに口を高速で回転させるダイソン。傍から見れば、高校生が小学生をいじめているようにしか見えない。

「大体、俺は死んだのならそれはそれで構わん。さっさと地獄なり地獄なり、どこへでも連れて行け」

なぜ行き先が地獄一択なのだろうか。というか登場から1話も経っていないにもかかわらず、早速キャラ崩壊を起こしている。

NIKEはダイソンの剣幕に、若干涙目になりながらも声を張り上げる。

「だから！　そういうわけにはいかないんだよ！　キミは最低72年は生きなくちゃいけないの！　その後は好きにしていいいからさあ！」

「黙れ。面倒だ」

「生きるのがめんどろってどういうこと！？　っていうかキミの死因からして意味不明だよ！　なんなんだよ！　」気が付いたら車道にいて、気が付いたら車にはねられる』って！　そんな投げやりな死因初めて聞いたよ！」

「そうか。奇遇だな。俺もだ」

「うがあああつ！ なにコイツ本当にめんどくさい！ ねえもう頼むから早く転生してよ！ 転生後の世界もステータスも決めさせてあげるからさあ！」

「おーこーとわーりしますー。おーこーとわーりします断固」

「そんな微妙にマニアックな曲よく知ってるね！ 正直『だが断る！』って来ると思ってたよ！ っていうか断らないですよ！」

「おーこーとわーりーしーまーすー。ご遠慮しますー」

その後もひと悶着あり、なんとかダイソンの説得に成功するNIKE E。

ちなみにこの間、ずっとダイソンは無表情を崩すことは無かった。

さて、気を取り直して

「……………それで？ キミはどんな能力が欲しいの？」

N I K Eは顔面の筋肉全てで疲労を表現しながら訊ねる。

対するダイソンは相も変わらず無表情だ。

「あ？ ああ、別になくてもいいかなー」

「いや、キミは何の能力も無い状態で行ったら『つまらん。飽きた。死のう』とか言っつて自殺しそうじゃん。一応ボクからも妨害はするけどさ、それじゃあ意味が無いんだよね」

なんと鋭い洞察力であろうか。さすがは神。

N I K Eの言葉に、ダイソンは何やら思案するように顎に手を当て、

「……そうだなー……じゃあさ、F a t eのバーサーカーとアーチャーのスペックが欲しい」

「スペック？ まあ良く分からないけど分かったよ」

「あ、ちなみに4次と5次両方で頼む。一回やってみたかったんだよねー。ゲートオブバビロン、みたいな………ってちよっと待った」

ダイソンはN I K Eにそう言うと、1人思考に陥った。

（4次と5次つて言っただけけど本当に両方いるのか？ 剣製が出来ればバビロンいらなくね？ 役割かぶつてね？ いやでも待てよそもそもバビロンは発動者の保有する財によって威力は変わるわけだから俺が使っても意味が無いのかいやそうとは限らないスペックの中に財が入っていれば十分運用可能だむしろ剣製の方が心配だな剣製はアー

チャーの知識と記憶があればこそ可能なのであつて俺なんかが技術だけ持つても仕方が無いしつまりギル様の財があれば万事解決か？……うん）

わずか1秒程で思考を切り上げ、NIKEに向き直るダイソン。なるほど、確かに気持ち悪い。

「とりあえず、さっき言ったスペックの中にエミヤの持つ知識とギルガメッシュの財、この両方を含めてくれ」

「??? あー、うん。了解」

NIKEは頷きつつも、実際にはよく理解していなかった。子どもには早かったようだ。

「えっと、それじゃあ転生する世界は、そのFate?の世界でいいの？」

しかし、そこで肯かないのがダイソンである。

「いや、アニメとか漫画の世界に行けるっていうなら、ISの世界に行きたい」

「……アイエス？」

「インフィニット・ストラトスだよバカ」

1 (後書き)

筋肉筋肉

2（前書き）

私は知っている。世の儚さを。
私は知っている。限りなき苦しみを。
私は知っている。 ” 力 ” の行く末を。
私は知っている。私の人気を。

モッピ―

「おい！ パスしろよ！」

ボールが規則的に跳ねる音と、室内シューズと床の摩擦音が耳に鬱陶しくまとわりつく。

「おい、デュエルしろよ！」

「うつせー蟹！」

ああ、本当に五月蠅い。

”私”は伏せていた顔を徐ろに上げた。

眼前に広がるのは、運動部が調子に乗る暑苦しい光景。

今は体育の時間。種目はバスケット。場所は某中学校の体育館。本来なら別々の場所でスポーツに興じるはずのこの時間。しかし今日は珍しい事に、男女の場所が偶然重なったのだ。

ちなみに私は隅っこで体育座りをしている。

何故か。答えは簡単。仮病を使って見学にしたのだ。

具体的には、

「安西先生、バスケットかだるいです」

「じゃあ八神さんは見学だね」

といったやりとりが先程なされた。

と言っても、別に本当にバスケットがダルかったわけでは……うん。やっぱりダルかったわ。

ってそうじゃなくて、体育を見学しているのにはそれなりの理由がある。

その理由とは、即ち私のチート能力である。

私が参加すると、それは最早スポーツではなく、一方的な蹂躪となるのだ。

故に、私は見学に徹している。

ピッ！

甲高い笛が鳴り、コートに入っていたクラスメイト達と、脇に待機していたクラスメイト達が入れ替わる。

私はそれをぼんやりと眺めながら、特に何も考えていなかった。

すると不意に、私の前に人の気配が現れた。

「ユウはまた見学？」

そう言って私に声をかけてきたのは、クラスメイトA。

名前は……なんだっけ？

「うーん、参加したいんだけど……。ほら、私が参加したらさ……」

「まあ確かに、ユウが入ったチームは絶対に負けなくなるもんね」

私の身体能力についてはクラスの誰もが知ることである。なので、今となつては体育不参加の私を咎める者は一部の例外を除いて殆どいない。

そう。一部を除いては。

「ちょっとユウ！ サボってないで入りなさい！」

再び私を呼ぶ声がある。地平線の彼方から、ビックバンの彼方から、私を呼んでる声がある。

あー、めんどくさい。

「いや、でm」でもモテクラシーも無い！ いいからそっちのチームに入って！」

私が断ろうと声を上げるも、それを遮る甲高い声が体育館に木霊する。

その声の主とは……

「^{ファン}鳳さんも懲りないねえ」

誰かが呟いたがその通り。一部の例外にして声の主とは^{ファン}鳳鈴音その人である。

こげ茶髪、ツインテール、黄色いリボン、低身長、ちっぱい。

このくらい特徴を挙げれば十分だろう。

彼女には何故か毎度の如く目の敵にされている。

いや、目の敵というより、ことあるごとに突っかかってくるのだ。

私が何をした。

「……はあ。仕方が無い」

私は嘆息し、犬歯をむき出して威嚇しているお姫様のもとへとくだらと歩を進み「なにしてるのよ！早く来なさい！」駆け足で向かった。

さて、遅くなったが、物語の開始を告げよう。

この物語は、かつては山田幸助（）、今は八神 優（）である私が、主人公、織斑一夏を殴ったKILLER物語である。

2 (後書き)

あー、ホント分かりにくいなー。

主人公の紹介　ゝ本当はこんな章、作りたくなかったよゝ（前書き）

主人公の紹介です。かなりのクズなので、読者に嫌われること間違いないし。

主人公の紹介　ゝ本当はこんな章、作りたくなかったよゝ

名前：八神優ヤガミ ユウ

性別：女

年齢：現時点で13才（リン、一夏と同じ学校）

容姿：

腰まで伸びた黒髪に、同色の虹彩。
身長は一夏よりも若干低い程度。

スタイルはそれなりに良く、何がとは言わないが、大きめである。
神から押し切られる形で貰った能力を使用すると、虹彩が赤色に染まる。

最初は「厨二っぽい！　かけー！」と、テンションが立ち上がり
「ヨだったが、2回目に気付いた時はすでに冷めていたのか、特に
何のリアクションも示さなかった。

性格：

天の邪鬼。それでいて面倒くさがり。

綺麗な言い方をするならば、『あまり出しゃばらず、どちらかと言うと控えめ。能力の関係上、自分が何かをすると既に結果が決まってしまう（例えば体育では無双してしまう）ので、極力何もしないようになっている。しかしそんな中にもしっかりと芯を持っており、他人や周囲に流されるのを嫌う』といったところ。

一応外面はいいようで、キャラもがつつり作りこんでいる。

本人は愛想笑いとポーカークフェイスに絶対の自信を持っており、曰く、それが対人関係において最大の潤滑剤であるとのこと。

好き：音楽鑑賞（V系と電波ソング）

嫌い：虫、他人、自分、鈍感主人公、努力、人の多い場所、流行

能力：

エミヤ、我様、巨人、甲冑の能力を持つ。

具体的には

- ・ 投影魔術
 - ・ 無限の剣製
 - ・ 王の財宝
 - ・ 武芸百般をこなすセンスと身体能力
 - ・ アーサー王をも凌ぐ剣術
 - ・ 拾った武器でも宝具クラスで扱える能力
- e t c . . .

しかし、渡すべき能力の取捨選択が出来なかった神のせいで、本来はあまり必要の無い余計なものまで付いてきている。

- ・ 赤い弓兵の家事、主人公スキル（朴念仁的なアレも含む）
 - ・ 黒いデカブツの履かないスキル（基本的には家では履いてない）
 - ・ 金ぴかAUOの慢心スキル（慢心せずして何が王か！）
 - ・ 基本的に自分を責め、他人に許されると不安になる（何故罰さなのですか！）
 - ・ 単独行動⇨協調性の無さ（何者にも縛られない俺、マジカッコイイ）
- e t c . . .

その他：

自殺が出来ない。事故死もしない。最低72年間生きることが既に決まっている。

こんなもんかな？ あとから追加するかもしれないです。

主人公の紹介　　～本当はこんな章、作りたくなかったよ～（後書き）

I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .

私は剣の骨です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074z/>

FateでIS

2011年12月17日12時02分発行